資料 73.2019 年 9 月相田証言 3

＜相田証言３.＞

この指示の件は、相田は石岡から何度か聞いているが、石岡はリーダーの指示（あるいは命令）というより助言というものであったとうニュアンスだった。現場の状況を把握出来るのは現場にいる者だから、という判断に立っていた。トランシバーや携帯電話がない時代であり、奥又白のキャンプ（BC）での準備段階での了解事項はあっただろうが、登頂パーティの現場での状況判断が優先された、と石岡は理解していた。トランシバーがあれば、現場状況に対する判断、3 人の状況が報告されて石原兄も 3 人の判断行動を一定程度了解できただろう。石原も「現場での状況判断が優先されるべきであるし、そうだった」と石岡と同様のことを言っており、石岡はこのことを了解していた、と相田は理解する。

ナイロンザイル事件に関して、相田は 1970 年前半から継続的に石岡に接触して取材を続けた。この間、東壁遭難の 1 ～2 年後ごろの石岡の心の内について、石岡との日常的会話の中で「自分は若山家の長男に生まれ、両親の期待を担いながら、石岡家に婿入りしたことと両親が可愛がっていた末弟・五朗を小さい時から山に連れて行き、結果的に山で死に至らしめた事は両親に対して実に親不幸なことだった。本当に申し訳ないことでした」と、しばしば口にしていた。五朗さんの事故遭遇によって倍加されることになった石岡の懊悩は、人間として相田は充分に理解出来た。石岡は表面的には理性的に振舞ってはいても内心では、常にこのことを忘れることは出来なかったのだ。

高井、湯浅が石岡を訪ねて「指示」について問いただした時期、石岡は体力的、精神的に衰え、老齢化が進んでいた。心臓疾患に加え脳梗塞をかかえ、あえて失礼な言い方をさせていただくが、頭脳活動も往年のようなものではなかったことは事実だ。この約 3 カ月後、緊急入院。翌日 8 月 15 日に心臓動脈瘤破裂で急逝している。当時の石岡は、高井、湯浅のたたみ込むような追及の場で二人の強い口調の問いに瞬時に立ち向かえる気力も記憶も衰えていた。相田にとっては、湯浅らの行動には、大いに疑問がある。

湯浅にとって辛辣、心外な表現かもしれないが、二人の「追及」について、相田は心身の衰えた病人への一種のいじめ的な行為と見えて仕方がない。

ナイロンザイル事件の追及は「新鋭ナイロンザイルのあっけない切断」が、立て続けに穂高山域で 3 件発生した事に対することで、石岡がいち早く立ち上がったことから始まった。ザ

イルメーカーに「早急に岩角での脆弱性」を公表しなければ、継続的にナイロンザイル切断による登山者の死傷事故が起きるという石岡の考えは、屏風岩中央カンテの初登攀で体験したザイルによる命拾いという貴重な体験と困難な初登攀を果たした体験を持つ登山家としての警告と活動であった、と判断せざるを得ない。同時にそれは、石岡と実の両親、家族と同じような悲しみ、つらさを犠牲者の家族に味あわせたくないという登山家としての人間性の現れであった。この行動は、ザイル切断による犠牲者が実弟であったこととはまったく別の事である。犠牲者が実弟でなければ、むしろ石岡の行動は制約を受けることなく、展開された。

石岡がナイロンザイルの岩角での弱さに大きく疑問を持ったのは、東壁での岩稜会の切断の他、明神（東雲山渓会）と北尾根（大阪市立大山岳部）で前後一週間に起きた計 3 件のナイロンザイル切断の東雲山渓会、大阪市立大山岳部の当事者からの資金カンパ、書簡などがあり、切断原因究明などを依頼されたことにもよる。この事実は、石岡のこの問題に取り組んだ根底の大きな部分である。

　しかるに、ザイルメーカー、JAC は長年に渉って石岡らの主張を無視した事実は、「安全」という大前提より企業、登山界の権威を守る事に固執した結果である。市井の人間である相田はそう判断して長年、石岡とナイロンザイル事件のその後を取材して来た。

優秀な登山家である高井と共に、明神 5 峰の 2263m峰南壁冬期登攀者である湯浅は登山器具の安全についてよりも、岩壁登攀者にとっては決してまれなことではないとも言える冬期の靴先のスリップという登攀技術が問題である、と指摘しているかに感じられる。

であるならば、扱いにくい麻ザイル時代からベテラン登攀者もスピーディな登攀を妨げるザイルをあえて身につけ、自身らを確保するというわずらわしいことをなぜしていたのか。あるいはするのか。

ザイルの存在が優先するのか、登攀者の技術が優先するのかではなく、第三者である人間から見れば、より安全なザイルの存在がベテラン登山者といえども起こりうる滑落から生じる死傷事故を防ぐ手立てであるのではないか、というのが率直な感想だ。

相田は、ザイルと滑落について、このように理解している。